平成２４年度「子どもをはぐくむ地域実践プロジェクト」
第１回地域家庭教育推進県中ブロック会議　会議録

■　日　時：平成２４年　６月　１日（金）　１３：３０～１６：３０
■　場　所：郡山市労働福祉会館（第３会議室）

■　参加者：
滝田　良子　氏（郡山女子大学短期大学部幼児教育学科准教授）
瀧田　　勉　氏（郡山市ＰＴＡ連合会副会長）
三本木正善　氏（郡山市子ども会育成会連絡協議会会長）
岡崎　初美　氏（郡山市スポーツ少年団理事長）※欠席
佐久間作代子氏（石川町主任児童委員）
針生　春子　氏（家庭教育インストラクター県中地区協議会会長）
佐藤　征昭　氏（放課後子ども教室活動「菅谷めだかの学校」指導員）
森　　勝雄　氏（須賀川市中央公民館館長）※欠席
鈴木由美子　氏（県中保健福祉事務所主任保健技師）
宍戸　光子　氏（郡山警察署生活安全課専門少年警察補導員）
渡辺さゆり　氏（郡山市民代表）
酒井　英資　　（県中教育事務所総務次長兼総務社会教育課長）
吾妻　　敦　　（　　同　　総務社会教育課主任社会教育主事）
猪狩　　仁　　（　　同　　総務社会教育課社会教育主事）※欠席
馬場　廣明　　（　　同　　総務社会教育課社会教育主事）
川前　照幸　　（　　同　　学校教育課指導主事）
計：１３名（３名欠席）

■　日　程：
・　本日の資料の確認等（馬場）　　進行：馬場

１　開会
・　あいさつ（酒井）

２　昨年度のブロック会議の概要確認並びに本日の会議の持ち方について（吾妻）

この会議は「福島県地域家庭教育推進協議会」と連携を図りながら、県中地区の家庭教育に関する現状や課題を把握し、保護者向けの講座や研修会を企画したり、広報誌やちらし等で情報を提供したりして、子育てに悩んでいる保護者の精神的負担を軽減したり、家庭や地域のつながりづくりに役立てる会議となることをねらいとしている。

それぞれの分野で活躍される方々を委員として委嘱し、今までの会議ではそれぞれの団体の活動の意義や様子、また、そのなかで見えてきた今の子ども達の問題などについて貴重な意見をいただくことができた。

この２回の会議をもとに、今年の１２月２日（日）に「家庭教育県中ブロックセミナー」をこの推進委員のメンバーを中心に立ち上げ、「ワールド・カフェ」という新しい方式でセミナーを開催することとなっている。進め方として、例えば「家族の力にはどのようなものがあるか」「家族の力が実感できたときやその瞬間にはどのようなことがあるのか」「家族の力がついてきたら、子ども達の学力はどう変わるのか」などをテーマに、自由でオープンな雰囲気のもと、参加者全員

が対話を重ねることをねらいとしている。そして、この対話をとおして、子育てに関するアイディアを生みだし、各家庭や所属する団体でそのアイディアをもとに、できることから少しずつ行動に移すことができればと考えている。

本日の会議では、前年度の課題をもとに各団体で取り組んできた実践例を発表し合い、意見交換を行うなかで、今後の具体的な取り組みにまでつなげていくことができればと考えている。

※　連絡事項として、

○　各組織の役員改選などで２名（郡山市ＰＴＡ連合会・県中保健福祉事務所）の推進委員の方が替わられました。また、昨年からご活躍いただいた１名の方には市民代表として今後もこの会に残っていただき、合計１１名の推進委員の皆様でこの会を運営していく。

○　本ブロック会議のアドバイザーを努めておられる滝田良子先生の「すくすくキラキラ　子育て応援」が毎週木曜日に福島民友新聞の地元紙に連載中である。

３　自己紹介並びに実践事例の発表（司会：滝田良子アドバイザー）

・　新しく委員になられた方もいるため簡単な自己紹介をする。
・　前回の会議後の各団体の取り組み内容等について発表する。

滝　田　※　別紙の新聞記事「すくすくキラキラ子育て応援」（福島民友新聞／４月より毎週木曜日に連載中）についての概要等についての説明がされた。

※　前回までの会議で話し合われた内容については、家庭や地域のあり方について考えさせられる事例が多く、改めてその大切さや重要性が理解され、推進委員間で情報を共有することができた。

東日本大震災後、仮設住宅を訪問し、その活動をとおして「生きるとは」「命とは」について真剣に考えることができた。また、被災地を訪問（写真を提示）し、地域のつながりやその重要性について考えさせられ、いろいろと知恵を出し合って未来を担う子どもたちのために何とかしなくてはならないという思いを強く感じた。

（１）子ども会活動をとおして

三本木　（別紙の配布資料より）平成２３年度の事業については、震災の影響により事業中止が多かったが、郡山市青少年親善事業（姉妹都市久留米市訪問）では３５名の小中学生を派遣することができた。プール体験（福島県内の屋外プールは実施できなかった）や靴づくり体験（世界に１つだけの自分の靴づくり）は、とても好評であった。

（２）放課後子ども教室活動をとおして

佐　藤　私たちの役割は、「子どもたちをけがなく安全にどう遊ばせるか」である。現在、菅谷めだかの学校は６年生１４名が卒業し、４月に４名の新入生が入ってきた。全校生徒も７４名から６０名となり少子化の傾向にある。震災の影響で、本来の菅谷小学校の校舎（旧滝根町）が使用できず、旧椚山小学校（旧船引町）で学校生活を送っているが、表土も入れ替え校庭での活動も平常どおりに行っている。５月に行われた運動会は、現在の学校では保護者の駐車スペースがないため、地元の滝根町営体育館で行った。

新年度を迎え、それぞれに児童も進級したが、上級生になると言葉遣いが生意気になったり弱い子をいじめたりする場面も見られる。そうした場合には、学校（先生方）との話し合いを持って早めに解決するように努めている。また、家庭環境も様々であり、大人（保護者）が子どもに与える影響力は大きいと感じている。

（３）ＰＴＡ活動をとおして

瀧　田　郡山市ＰＴＡ連合会は、「子と親が共に育つＰＴＡ活動」を目標に、地域や市民へ情報を発信している。（別紙の配布資料より）平成２４年度移動消費生活センター事業についての説明がなされた。（年間１４講座を予定）

ＰＴＡ主催の家庭教育学級では、（瀧田勉さん、自らが講師を務める）ハーブを使った親子体験教室を開催している。また、（瀧田勉さんご夫妻、自らが指導員を務める）地域子どもクラブ「こはらだっこクラブ」では、活動をとおして親子のふれあいを探っていければと思っている。活動をとおして学校（先生方）との情報交換の場ともなっており、とても効果的である。

（４）家庭教育活動をとおして

針　生　震災後、学校と地域がなかなか一つにならなかった。各市町村の家庭教育インストラクターは、各地域でそれぞれに頑張って読み聞かせ等の活動をしている。私自身も住んでいる地域で「みどりのサポーター」（公民館内に設置）として毎日活動をしているが、学校側になかなか理解されない面もあり、時間をかけてゆっくりと進めているところである。また、放射線量等の問題から、子どもたちの日常の生活のなかで制約されている部分が多く、かわいそうに思う。今年度は具体的な取り組みを行い、更に家庭教育に力を入れ活発にしていきたいと思っている。

滝　田　日常的に場所があり、そこに人がいることはすばらしいことである。「あそこに行けば安心できる」ことが子どもや親にとって大切なことである。例えば、郡山市にあるニコニコ館も同じで、いつ行っても多くの子どもと母親を目にする。そこが親子で安心できる場所だからこそ、毎日集まって来るのだと思われる。

（５）主任児童委員として

佐久間　主任児童委員として、２期目に入り多くの町民に名前や顔が覚えられてきている。散歩の途中に気軽に声をかけられたり、電話での相談もある。相談相手も顔も分かるためか安心して話せるようになってきている。不登校の子どもの問題についても、該当する家庭や学校との連携もあり、少しずつ関わり合いが持てるようになり、登校できる子どもたちも出てきている。しかし、多くのそうした家庭ではまだまだ他人に介入してもらいたくない面も強く持っている。

町民に普段の活動を分かってもらうために、保育所へのお手伝いや年１回の幼稚園・小、中学校への訪問事業もあり、たいへんに有効的である。特に小学校での読み聞かせは大きい子どもたち（高学年）にも喜んでもらっており、昔を懐かしんでいるように見える。

滝　田　主任児童委員と民生委員との関わりのむずかしさをよく耳にする。うまく連携・協力して今後も進めてもらいたいと思う。

（６）保健技師として

鈴　木　母子保健は、病院との連携による未熟児の家庭訪問、身体障がい児等の療育指導、特定不妊治療関係等の相談、思春期ホットライン専用電話相談も行っている。

児童福祉は、児童の健全育成、保育対策推進事業を実施。ひとり親家庭等の福祉では、母子・寡婦福祉資金の貸与。女性福祉では、ＤＶに関する相談・保護もある。里親制度は児童相談所が窓口。保健福祉事務所では、里親への扶助費の支払いを行い、里親から養育報告書の提出がある。

滝　田　里親制度については、戦災孤児などでよく耳にしましたが、現在では遺棄や虐待を受ける子どもなど社会的養護を必要とする子が多いとされておりますが、今回の東日本大震災において孤児となってしまった子への里親制度の申請ケースが増えていること、特に親族里親制度の申請は注目です。

（７）少年警察補導員として

宍　戸　今年度で４年目になるが本警察署内には２名の補導員がいる。主な仕事内容は街頭補導（ボランティアといっしょに行う場合もあり）、小・中学校での防犯教室、不審者対応教室などである。最近は虐待問題で、近所からの泣き声通報も受けている。

（別紙の配布資料より）震災後、刑法犯罪が減ってきている。刑法犯罪の特徴としては、再非行の割合が多い。原因として考えられることは、複雑な家庭環境の問題や保護者の子どもへの愛情不足等が考えられる。また、子どもを日頃構わないのに、「他人からは言われたくない」「介入してほしくない」という面を強く持っている。

（別紙資料、平成２３年度版「地域安全白書」より）ペップキッズ・サイクルマスター・グリーンフォースのボランティアがあるが、グリーンフォースについては、設立４年目になるが、震災の影響もあってか中学生から大学生まで１０１名もの会員がいる。

また、保護者の皆様へのお願いとして、お子様の所持している携帯電話のフィルタリング１００％をめざす呼びかけを行っている。使用するにあたってのきまりづくりを親子できちんと行ってほしい。これらについては出前講座も行っており今後も継続して取り組んでいきたいと思っている。

滝　田　仮設住宅へのボランティア活動から、参加している学生は始めは何をしてよいか模索するが、やる気や情熱は持っているため一生懸命に活動をしてくれる。再犯が多いということは今後のキーワードになっていく。やはり保護者の子どもへの理解が重要である。昨日の深夜のＴＶ番組より、父親・母親の代行業についてのドラマが放映されていた。実の親よりも懐いていく姿は何とも言えない複雑な心境であった。

（８）市民代表として

渡　辺　他人からの干渉はされたくない保護者や家庭が大半であるが、子どもは母親（その家族）だけで育てるのではなく、地域全体で育てるよう啓蒙し合うことが大事である。そうすることによって、お母さんやその家族は気持ちが楽になり、余裕が出てくるものである。

歩きタバコをしながら、入学式に向かう２０代後半と見られる若いお母さんを目にする機会があった。モラルの低下を感じ、ちょっと残念に思えてしまった。

ものの豊かさや心の豊かさが経験できれば、家庭教育学級は充実していくものと思われる。

滝　田　子どもにとって社会的な基盤がしっかりしていることが大切である。どうしたらその基盤

がしっかりしていくのか、それは「子どもたちが安心に学業に専念できる」ことである。

― 休　憩 ―

川　前　（要項ｐ６より）秋田県の学力向上への取り組みについて、家庭での学習習慣が定着しており、家庭・地域との連携・協力もうまく図られている。家庭・社会・地域の基盤がしっかりしていることが大事である。

三本木　なぜ、こんなに秋田県は高い数値なのか？

酒　井　３世代同居率も高いことから、礼儀正しい子どもが育てられていることは間違いないが、産業構造の差が地域によって大きく影響していることは無視できない。例えば、山間部と都市部とでは変わってくる。数字だけでは簡単に判断はできない面もある。

三本木　携帯電話のフィルタリングについては、学校ではどのように指導しているのか？

川　前　学校によっても違うが、例えば、入学式後の保護者会等で、そのきまりについての説明がなされている。そのきまりのなかでの使用となっている。どの学校においてもきまりやルールは子ども・保護者に説明はされている。

渡　辺　高校では、授業中は電源をオフにしておくこととなっている。もしも着信音等が出た場合は、没収され保護者が学校に取りに来るようである。

滝　田　大学の場合は、自己責任となる。

馬　場　（要項ｐ７・８より）福島民報新聞記事より「食育に関する意識調査」では、家族と夕食を摂る割合が前回の調査に比べ、７１．６％（１５．１％増）と高い数値が出された。また、携帯電話については、例えば、小学校５年生では、６５．７％の保護者が不必要と感じているが、所持率は２３％と過去最高の数値が出された。

４　研究協議（司会：滝田良子アドバイザー）

話題提供「東日本大震災から学習したこと（すべきこと）」

震災後、刻々と状況が変化する中で「判断力」「決断力」が求められ、そこにさらに「責任」という重圧の中で、それぞれが活動中であった場合の各委員の対応について考えてみましょう。

上記のテーマのもと、お菓子を食べながら自由に、それぞれの立場でフリートークをしてもらう。

滝　田　震災直後のある幼稚園では、室内に入れないため園庭に毛布や布団を敷き避難していた。しかし、当日は寒く雪が舞う天候であり園児の健康状態が心配された。その時に近所に住む人がシートを持ってきて、それで屋根を作ってくれた。

そんななかある保護者が子どもの様子を見にきて、子どもの安全を確認したらまた帰ってしまった。後で確認したところ、震災で家の壊れたものの片付けをしていたようである。この保護者と近所に住んでいる方の事例について、皆さんはどのように思われますか。

また、ある郡山市内の保育園の事例では、５歳児のクラスが福島市へ園外学習に出かけ、その帰りに今回の震災に遭遇してしまった。金谷川付近の陸橋上で電車は緊急停止したが、保育士たちは子どもたちの避難に苦慮した。すぐに避難した方がよいかもう少し車内にいるべきかなどである。その時ちょうど同じ列車にはＪＩＣＡ（独立行政法人・国際協力機構）の人たちが乗っており会議が終わり帰る途中であった。携帯電話も使用できず音信不通の状態であったが、ＪＩＣＡの人たちが持っていたパソコンを使って連絡をすることができた。その後、消防団の協力を得て地域の公民館に無事避難することができた。

このような事例からも、判断力・決断力・責任は一体化しているように思う。

酒　井　　いくら防災マニュアルが作成されていても、このような状況のときにどう対応するのかが、日頃より考えていなければ何の役にも立たなくなってしまう。震災当時、教育事務所では大半の職員が福島市への出張で人数が少ない状態であった。北分庁舎は壊れ、全員で２１世紀の森公園へ避難した。そのようななかであっても若い職員は日東病院の患者さんたちを背負ったりしながら、その避難に協力した。

このような状況のなか、公園内で第１回の災害会議を開き今後の対応について話し合いを持った。そこに残っている人たちが判断し行動に移すしかないと考えている。自己判断力が必要であり、子どもたちへその術を今後教えていかなければならない。併せて、原発問題も放射線等に関する科学的な教育が必要であり、自己決断・責任の必要性について子どもたちへも教えていかなければならない。

佐　藤　　５月３１日の午後２時２９分の余震の際は、校舎の２・３階で活動をしていた。全員が机の下にもぐったが、その恐怖心は大きいものであった。

三本木　　震災当時、国道４号線を車で走っていたが、道路は凄まじい状態であった。慌てて車外に出たがどこが安全な場所なのかまでは確認できなかった。果たして、急いで車外に出たことが良かったのか悪かったのか、その判断力はどうだったかは分からない。

瀧　田　　次の世代にきちんと引き継いでいく必要がある。震災関係では、余震等発生するとＴＶのアナウンサーは緊急地震速報として「落ち着いて行動してください」を言っていた。毎回どのように落ち着いて行動してよいかが問われる内容であったように思われ、疑問に感じた。情報の必要性を強く感じたが、ラジオ福島では、毎回、より具体的な内容のアナウンスがあり印象的であった。例えば、「広い所に逃げなさい」等である。このような状況のなかでは、落ち着いた行動ができない場合が大半であると思う。ここでやはり必要になってくるのが判断力なのかと思う。

５　総括（滝田良子アドバイザーより）

私たちはサポートリーダーであり単なるボランティアではない。子どもたちが安心して学業に専念できる環境づくりをしていかなくてはならない。一瞬の判断が問われ、時には命に関わる内容もあるかもしれない。日常の生き方が反映された知識を身につけ、専門家としての誇りを持った取り組みが要求される。また、物質的な支援だけではなく心の支援も必要となってくる。

これからの子どもたちは私たち大人の姿を見ている。大人がお手本となり、後世に伝えていく必要がある。

６　閉会　　進行：馬場

・　御礼のことば（酒井）
・　諸連絡（馬場）
　　次回のブロック会議について（群馬大学、音山先生が参加）
　　セミナーの持ち方等について（ワールドカフェ・参加者募集）
　　子育てサポートチーム養成研修について（参加者募集）
※　解散

７　その他

福島民報社郡山本社、福島民友新聞社郡山総支社の取材対応。（吾妻）（記録：馬場）